

# 重森三玲の庭が大阪にあった

## 山椒は小粒でぴりりと辛い初期の作庭

深夜ラジオで、先月“大大阪”の時代をしゃべってきた。「中村壺太郎のうえほんまち夜カフェ〜知的おおさか塾〜」という番組である。私の出番は11月放送なので終わってしまったが、「知的好奇心刺激ラジオ!」を謳い、「深夜のカフェを舞台に、お笑い・たこやき・タイガース・・・だけやない、大阪の文化や歴史を掘り起こし」ていく趣旨の企画である。

カフェ・マスターの中村壺太郎さんは、四代目中村鴈治郎のご子息で、舞台やテレビで多彩に活躍される若き歌舞伎役者である。収録場所の上本町の銭屋本舗さんも大阪文化の発信に力を入れておられる。壺太郎さんから、大阪の将来のため何が必要か質問された。過去の歴史を今一度、学ぶ必要があるのではないか、というのが私の答えである。

近年、市外からの流入も増え、インバウンドの外国人観光客も多い。大阪の歴史や文化遺産などを消耗品のように扱い、目先の金儲けにならないと決めつけて切り捨てるのではなく、後世に正しく伝え、そこで耕された土壌から芽生える新しい伝統を育成していく必要があると思うのである。そのためには、思い込みや不正確なおもしろ話ではなく、謙虚に大阪の歴史に向かい、その豊かな歴史や文化への理解や知識が必要となってくる。

と、偉そうに言ってみましたが、私もまだまだである。最近、驚いたのが、有名な造園家で庭園研究者の重森三玲(1896~1975)の設計した庭園が大阪市内にあったことである。

京都では東福寺方丈、龍吟庵、松尾大社の庭などが三玲の作庭で知られるが、大阪市内は知らなかった。それも、中学高校の同級生である井上君の生野区の自宅の庭がそうだったのである。彼と食事をしたとき、「うちの庭はね…」ということで、実に半世紀を隔てて、そのことを知った。平成20(2008)年度の大阪市指定文化財「記念物 名勝、井上家庭園」がそれで(非公開)、庭の正式名称は「巨石壺庭」。

竣工は昭和15(1940)年。井上君のお祖父さんが、三越建築部に依頼して三畳台目の茶室を建てた時、庭園設計者として三玲を紹介してもらったという。中国山水画にそびえる峨峨たる巨峰や、深い溪谷を切り取ったようなダイナミックな小宇宙が、石を立てて並べることで出現する。有名な東福寺方丈庭園の翌年の作品として力が籠もり、枯山水を得意とした三玲の特長が発揮されて、茶室の庭として、手水鉢など「つくばい」を囲むように置かれた緑色の緑

泥片岩と、赤みがかった鞍馬石との色彩の対比効果も計算し尽くされている。

戦前から三玲は、勅使河原蒼鳳らと「新興いけばな宣言」を起草し、前衛いけばなの普及や発展にも尽力している。侘び茶の庭だが、造形感覚も斬新で、幾何学的なかたちを組み合わせ、抽象絵画のコンポジションを立体化した、時代の尖端の庭と見ることもできるだろう

大阪にある三玲の作庭では、大阪城内の豊國神社の「秀石庭」(昭和47(1972)年)や、国の名勝である岸和田城「八陣の庭」(昭和28(1953)年)、枚方市の「以楽苑」、泉南市の林昌寺「法林の庭」(ともに昭和36(1961)年)などがあるが、「巨石壺庭」の規模は小さいながらも年代が早く、三玲初期の貴重な庭園である。維持管理は大変だろうが、こんな庭とともに生活できる井上君がうらやましい。

「三玲」という名前だが、若いときに画家をめざし、重森計夫から、岩波書店のマークとなった「種まく人」でも有名なフランスの画家ミレーにちなみ改名する。子どもたちもヨーロッパの偉人にちなみ、長男は完途、二男は弘淹、長女は由郷、三男は執氏、四男は貝齋と名付けられた。

「うえほんまち夜カフェ」で、大阪の歴史を知ってほしいと話してきた私自身、三玲の庭園は知らなかった。大いに反省して、新年さらに勉強せなあきませんな。



立てられた石は鋭く、造形的である。  
中田勝康  
『重森三玲 庭園の全貌』  
学芸出版社、2009年より

### 筆者プロフィール

橋爪節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など。